
氷の村とミイナ

河合ひさとし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の村とミイナ

【Nコード】

N4133X

【作者名】

河合ひさとし

【あらすじ】

氷に覆われた島に住んでいる2人の主人公は、島の遺跡にいたミイナという女の子と一緒に、居なくなった村の人を探す旅に出ます。

洞窟の石像

「寒いなあ…」

氷の浮かぶ海を眺めて呟く。呟いた息も真つ白で地面も雪が積もっていて白いのに、まだ雪は降り足りないらしく大粒のものが次々と落ちてきている。見上げると、空は真つ黒くて見えているだけで気分が沈んでくる。

（あの海の間こうはどうなってるんだろう…。ずーっと氷なんだろうか…。それとも、本で読んだみたいに森があったり砂漠があったり、街があったりするんだろうか…）

「今日は何が見えた？」

後ろから話しかけてきたのはメロン。小さな村で一人だけいる同い年の女の子で、村の中ではお金持ちの家の子。

「見えないよ。いつもどおり」

「帰ろ」

そっけない態度で、こっちの反応を待たずにスタスタ歩きだす。

僕もついて行く。

（呆れられてるかな…。最近毎日来ているから…）

「僕…いつか海を渡りたいな。海を渡って陸地を探してみたい」

「ソウデスカ、イケルトイイデスネ」

（棒読み…）

メロンは全く関心を示さなかった。

村に戻ると、ちょうど父さんが魚を村に運んできているところだった。

「おー、レオ。ちょっと手伝ってくれないかー？」

「うん…。それじゃ、メロン」

「ばいばい」

メロンと別れて、父さんと一緒に魚を運びに行く。

（また同じことの繰り返しか…）

「どうしたーレオ。浮かない顔して」

「ん…。海の方こうの街にさ、いつか行きたいと思ってね…」

「大人になったら行つてきな、もうあと5年じゃないか」

「うん…。そうだね」

（長いなあ…。退屈なんだよ…）

村を出れる年齢というのが決まっている。5年。それまでがとても長く感じる。この村であと5年。

手伝いが終わって自分の家に入り、2階の自分の部屋へ。ライトを点けようとするが点かなかった。蓋を開けてみると鉄の筒が2つ出てきて、手の中で転がす。

（…燃料が無くなつたんだな…まだ重いのに）

大陸では、地面の中とか遺跡からちよくちよくこういう便利なものが出てくるらしい。開けて調べている人たちもいるらしいけど、まだまだ分からないことだらけだとか。

仕方がないのでランプを火を点けて本を取って読む気もないのにばらばらとページをめくる。

（明日は村長さん家で勉強か…）
ため息が出た。

次の日。村長さんの家に向かった。

「おはようございます」

「おはよう」

村長さんはふさふさしたひげとぴかぴかした頭が特徴のおじいさんだ。父さんが子供のころからこの顔だったらしいけど、何歳なんだろう。

「おはよー」

メロンもいる。僕とメロンは村長さんの家で週4日ほど勉強している。

「さて、どのへんからだったかな…」

のんびりと本をめくり、読み上げ始める村長さん。この声が眠気を誘ういい音程なんだ。

「起きろ」

小声を出して肩をつついてくるメロン。

「まだ寝てない」

言い返す。

「今日はここで終わりにしよう」

村長さんは本をパタンと閉じた。

「え。今日は早いですね」

まだ午前中だ。

「…この家に伝わっている本を調べてみるとな、村の北に何やら遺跡があることが分かったんだ。2人で行って調べてみてくれないかな」

「はい！」

ちよつと日常とは違うことが起こった。それだけで気分が舞い上がる。

「はあ…」

メロンは面倒くさそう。

村長さんの家を出た。

「じゃ、私は帰るからレオよろしくー」

「なんで？」

「寒いし。こついの好きでしょ？」

「一緒に行こうよ…2人で行けって言ってたし」

「めんどーくせー」

一旦解散して、昼ごはんを食べたあと、村のすぐ外で待ち合わせした。

「さ、とつと行こう行こう。何も無いの確認するだけだろうし」

やる気無い声を出すメロン。

「行こう行こう」

僕は楽しみだ。

村長さんの手書きの地図を見ながら歩いていく。見づらい。

「…」

「…」

「どうしたの？…上下逆だったの？裏は何も書いてないよ？村の場所も分かんなくなってる？ねえ、ねえ？」

「メロン、うるさい」

「はいはいー黙ってますよー。レオくんのだいぼっけんだもんねー」

「…」

「…」

「こつちでいいのかな…」

結局メロンに地図を渡した。

「ん？んー…ん？んー。…きつと、いいんじゃない？うん」

分からなかったみたい。でも、地図は手放さない。

「あれ、隣村だね。地図に書いてある？」

「ん？んー…」

やっぱり分からないみたい。さらに、上り道になった。人がめっただに通らないところだから雪が多くて歩きにくい。

「ん？あれなんだろ」

メロンが立ち止まった。見ている先を見ると、上り坂の先に長く分厚い板のような岩が倒れていた。近づいてみる。

「これ動かせば入り口なのかな」

「無理だ。帰ろ」

くるつと振り向くメロン。でも、そのまま止まって、足で地面を叩き始めた。

「…何やってんの？」

いらいらしているのだろうか。

「氷の下に何か見えるからさ…」

そばによつて見てみる。ひび割れた氷の下に何か黒いものが見える。

「えい！」

僕も踏んでみる。

がつつ、ばらばらばら…

ひび割れていた氷はあっさりと壊れた。

「レオ！先に進めるよー！！」

「ほんとだ…」

割れた場所を覗くと、下には広い空間があつた。

「よつこらせつ」

メロンがお年寄りみたいな声を出して飛び降り、僕も続く。

（いつの間にか先頭切つて進んでる…）

「寒いー…」

ぶるぶるつと体を震わせるメロン。ところどころ黒い板が見えるほかは氷で覆われていて、保存庫に入れられた魚になったみたいなき分だ。

「わ…ドア？」

「…メロン？」

メロンの視線の先には、氷の壁と天井と床の中で黒いドアが埋まつていた。

「誰かの家つてことはないよね？」

急に不安がるメロン。

「家つてことは…ないと思うよ？誰も出迎えてこなかったし…」

「…」

「…」

「開けてみなよ…」

「メロンがどうぞ…」

ふーっと息を吐いてメロンはドアノブをひねる。

「開いたよ…行こう」

「うん…」

「…怖くなった？」

こっちに振り向いてきた。

「うん…怖い。でも、わくわくもする…」

「私も。久しぶりに楽しい」

メロンは口元を笑わせて目は輝いて、手は少し震えていた。僕も同じなんだろう。僕達はドアの先に進んだ。床には石が敷き詰められていて、壁と天井は草木などの彫刻が施された石でドーム型になっていた。

「…像？レオ…あれ…」

前方には小さな像。女神像なのか？が立っていた。

「凄い…こんなところに聖堂みたいなものがあつたんだ…」

天井が高い。

「どこの女神様だろう…これ。幼い感じだけど…。ん…ひび入ってるね」

像に興味津々のメロン。

メリメリメリ…

「何の音かな？」

メロンも首を振った。分からないらしい。

「気のせいかな…ひびが大きくなってるような気がするんだけど…。ちよつと見て…」

像の頭にできたひびを指をさして説明しようとする。

パン！！

「きゃ」

「うわあー！！」

乾いた音がして、突然あたりを強い光が包んだ。

「…ふう…おさまった…レオ？」

「…大丈夫」

頭を振ってみる。

「ん？誰？あれ…」

前に誰がいる。

「レオ？」

僕の向いた場所を見ているメロン。その先の、像があつた場所には女の子が座っていた。赤色の長い髪と大きな目、人形が着るようなきらきらした服。

「か…かわいい」

メロンは子猫を見ているような顔だった。

「だね…。って像の中にいたの？あの光は？」

「…ん？うーん…」

メロンも考え込んで固まる。

「…」

「…」

しばらく2人で顔を見合わせて黙っていた。

「だ…れ…？」

か細い声が聞こえてはつとなつた。

「！ええ…っと、私はメロン」

「ぼ、僕はレオ…き、君は？」

「…ミイナ…」

「どうして、ここに？」

「…分かんない…」

涙目で小刻みに震えていた。弱々しさがまた、こう思ふのは不謹慎かもしれないが、かわいらしい。

「あの」

さらに話そうとした僕をメロンが目で止めた。詳しく聞くのは無理ということだろう。

「どこか、行く場所はあるの？」

「…ない…」

「私達と一緒に村に行こうか？」

ミイナはしばらく黙ってから、

「……うん」

目を僕達に目を合わさずに答えた。

メロンがミイナの手を引いて村に戻った。

「手を引いてるわけじゃないんだけど…」

ちよつと照れてるメロン。

「なつかれてるのかな」

ミイナはずっとメロンの腕をつかんでいる。不安なのだろうか。

「疲れた…」

結構歩いた。

「すっかり日も暮れちゃったねー」

ようやく村の入り口にたどりついたら、網に入った魚を運んでい
る父さんがいた。

「ん？お前らどこ行ってたん…」

どうやって説明すればいいんだろう。

「どうした？その子、お前らの子か？」

笑いながら冗談を言う。

「村の外でうろつろつしてたんですよ。迷子になってるのかも…」

メロンが説明してくれた。

「隣村の子にいたかな…うーん」

父さんは腕組みして悩んでる。でも僕達は知ってる。思い出そう
としてもいるはずがない。

「どこから来たの？」

父さんが直接ミイナに聞いた。

「洞窟から…」

「洞窟？どこのかな？」

「…」

メロンの手をぎゅつとにぎる。

「…じゃあ、お父さんお母さんの名前は？」

「…」

泣きそうな顔。

「…うん。やっぱりお前らの」

顔を上げて僕達を交互に見る。

「それは違う」

軽く流すメロン。

「とりあえず、明日隣の村に連れて行ようかな…」

とりあえず、その場を取り繕っておこう。

「今日のところは私の家にでも…それでいい？」

「うん」

ミイナはちょっと嬉しそうにメロンを見上げて返事した。

ペンダント

次の日、父さんには隣村に行くと言って村を出た。

「さて…どうする？また洞窟行ってみる？何か見つけられるかもしれないし…」

隣村に行っても意味が無いことは分かっている。

「んー…そうだね。それでいい？」

今日もミイナはメロンの手をつかんでいる。

「うん」

雪道を歩きだす。

「確かこつちだったよな…」

「多分…迷ってたし…」

しばらく昨日の分かりにくい地図を眺めながらうろつろ。

「あれ、きれい…」

ミイナが指差している方向を見してみる。太陽の光にツララが当たってきれいに輝いている。

「ん？ちよつと？」

ミイナがメロンの手を引っ張ってぱたぱたと走り出す。

「こつち、こつち！」

「あ、危ないって！走ったら」

「わっ！」

どてつ。ミイナが転んで、ついでにメロンも転んだ。

「ごめん。…お姉ちゃん」

ミイナが泣きそうな顔で謝る。

「？お姉ちゃん？ま、まあいいよ。ゆっくり歩こ？」

少し照れてるらしい。

ぴきっ…

？

2人が立ち上がろうとする。そのとき、何の音か予想がついた。

「待つ」

動かないで、そーっと移動して…と言おうと思った。
バキバキバキ、ガラガラガラ…!!

「きゃわああああああ!!」

「わああああああ!!」

「メロン!!ミイナ!!」

崩れて開いた穴に走る。…走ったら危ないんだった。

「うわ!!わわわ…わわわ!!」

僕も滑った。

ドガッ

「ふぎゃ!!」

穴は思ったより浅かった。後から落ちてきて、蹴っ飛ばしてしま
ったメロンが猫のような声を上げる。僕はしりもちをついて着地。

「いっつ!!いっつ!!いっつ!!えええ!!何だこの野郎!!」

立ち上がって怒鳴ってきたメロン。怖い。ミイナがびくつとして
僕のそばによってきた。

「ご、ごめん…。ミイナは大丈夫?」

「うん。平気」

怖がったミイナを気遣うメロンと、機嫌を治したミイナ。

「あ…お、思ったより浅くてよかったね…」

メロンの顔をうかがってみる。

「ふう…。まあ、ね。蹴りのほうが痛かったけど」

「ごめんごめん…。ここも、昨日の洞窟みたいな感じだね…」

黒い柱があちこちに立っていて、黒いタイルがところどころに見
える。

「…実は意外とたくさんあったのかもね…」

キョロキョロと周りを眺めるメロン。

「探索してみよう」

3人でうろろろしてみる。

「ここも聖堂みたいなものかな…」

「昔の人って教会とか神殿とか、そんなのばかり造ってたらしいからね。あつドアもあった」

メロンが柱の間を指差した。

（また像があつてミイナが増えたりして…）

「…」

「…」

ドアの前で立ちすくむ。

「どうぞ？」

「今日はレオでしょ？」

深呼吸してからドアを開けた。広い部屋。壁と天井は彫刻が彫つてあつてドーム状。

「昨日と同じ…でも像は無いみたいだ」

「彫刻掘ってる間に一つ聖堂造れば十分だつて気づいたんじゃない？」

（ふてくされたメロンに戻ってる…）

「あれ、なんだろう…」

昨日像があつた場所に今度は彫刻が掘つてある長い箱のようなものが置いてあつた。

「そりゃ…見た目どおり…棺でしょ？」

「…」

「…」

立ちすくむ。

「…どうぞ？ここは男らしくさ」

やっぱりメロンは僕に任せるらしい。

「…僕はらしくなくていいからさ…ここは漢らしく…」

「あ？」

凄い目で睨んでくるメロン。

「わ、分かったよ。開けるよ…。ミイナを」

ミイラでも入ってたなら、ミイナがかわいそうだ。

「うん」

メロンはミイナと一緒に離れた。

「よいしょ…」

ぎ…ぎ…ぎ…

棺を横にずらそうとしてみた。なかなか動いてくれない。

「ぬぬぬぬぬぬぬぬ…。ふう…ふうふう。重いなこの蓋。釘が打つてあるのかな」

周囲を確認するが、よく分からない。やっぱり力が足りないのか。

「ぬぬぬぬぬ…。ふう…。重い…。あの…」

「…分かった分かった！手伝えばいいんでしょ！？」

メロンがづかづか歩いてきた。やっぱり頼りになる。

「よいっしょ！はいさ！」

「メロン、力が抜けるよその掛け声」

「うるさ」

ずずず…

「あと少しだ！」

どきどきしてきた。

ずずず…ドオン！

半分まで押した蓋が傾いて地面に倒れこんだ。

「うわああああ！」

「きゃああああ！何何々！？何が入ってたの！？」

取り乱すメロン。叫んだのは僕が先だけ。

「いや…その…見てない。なんとなく叫んじやった…」

「レオ…私の寿命を縮める気？」

2人で恐る恐る近づいて、そーっと覗き込む。

「武器…。宝箱だったんだ…」

錆びてないぴかぴかの、大剣、斧、槍、弓、杖などたくさん入っていた。

「ほふうー…。全く、ほんと何びびってんだか。ドア一つ開けるにもおどおどして、蓋を開ける力も無いなんてほんと貧弱だし、何も見ないでうわーとか叫んでほんとびびりだし、ほんとに一緒に

いるとほんと疲れる」

緊張感から解放されて饒舌なメロンを横目に、大剣を両手でつかんでゆつくり持ち上げてみる。

「よつと…。おう？つとつととと」

つかんだ瞬間に大剣を振り上げてしまい、勢いで後ろに下がる。

「思ってたより、軽かったんだ？」

にやにやしながら見てくるメロン。

「うん…軽い。本物じゃないかもね、これ」

「よつこら、おつと。ほんとだ軽い。何でできてるんだろ？」

メロンは自分の身長くらいある斧を取り出した。

「ツララで試してみよう。やあつ！！」

大剣でツララを斬ってみた。

すぱっ、ことん

切り口の面はきれいに平らになった。

「私も…せい！せい！ほいさ！」

メロンは斧を横に右に左に振った。

ことんことん

斬ったツララは割れることなくばらばらに。やっぱり切り口は平ら。

「凄いこれ…」

うつとりしながら、斧を眺めているメロン。ちょっと怖い。

「…もう、そっちいつていい？」

ミイナだった。すっかり忘れていた。

「あ、大丈夫だよ。腐った死体じゃなかったから」

「え…」

大丈夫という言葉聞いてから、腐った死体とか言われて、こっちに来ようとしたミイナが立ち止まる。

「メロン…」

肘でメロンを突っついて警告する。

「しまった…。大丈夫、おいで」

メロンはミイナのほうに向かって歩いて、ミイナもやってきた。
「……」

ミイナがじーっとメロンの斧を見ている。

「ミイナもほしい」

「はい？これ？」

「うん」

困るメロン。こんな切れ味の武器は危ない。あ。

「杖なら大丈夫じゃない？」

「あ、そうか」

がさごそと杖を探すメロン。

「……どう？」

ミイナに杖を持たせてみた。杖が長すぎる。それに、ひどく不満そうだ。

「刃物はやめときなつて」

メロンが諭す。

「……ん」

不満そうなミイナ。

「メロン。これは？」

宝箱の中にはペンダントも入っていた。

「ど？」

メロンがミイナの首にかけてみる。ペンダントもけっこう大きいけど似合ってるかも。

「うん！これがいい」

とてもうれしそう。

「さて……他に見るものもないみたいだし……帰ろっか？」

「そうだね」

メロンに同意して帰ることにする。来た道を戻って最初に滑り落ちた場所へ。

「浅いし……登れるね」

僕が最初に登って、ミイナをメロンが押し上げて、最後にメロン

が登って終わり。

「…」

帰り道、ミイナはペンダントを光に当てて反射を楽しんだり、顔に近づけてじつとみたり、遠ざけて眺めたり、ペンダントから手を離してポーズをとってみたり。お気に入りらしい。

僕も自分の剣を眺めてみる。僕の顔が薄く写っていて、薄く向こう側の景色も見える。透きとおっていてきれいだ。

「あ、隣村見えるね…一応寄ってく？」

「無駄でしょ。やめとこ」

メロンに却下されたので、そのまま進む。

「やれやれ…2日続けて大冒険だった。戦利品もあるけど」

メロンはそう言いながら斧を眺めて満足げ。

「いくらで売れるかな、これ」

そして、こつちを見てくる。

「…売るの？」

「持っててもしょうがないでしょ？本の中の怪物と戦えるわけじゃないし」

「まあ、それはそうだけど…」

僕は取っておこう。

「ふう…ようやくついた」

ほっとする。村に着いた。

「よう…。な、何持ってたんだよ…」

また父さんだ。物騒な物を持つてる僕達に驚いている。

「村に行く途中の洞窟で見つけました」

『どうだ』といわんばかりのメロン。

「洞窟？そんなものがあつたのか？」

驚く父さん。

「はい…足をすべらせて…云々」

メロンがいろいろ説明。

「はあ…。で？肝心のミイナちゃんの親御さんには会えた？」

「いいえ…。まあ、当分私の家に居させてもらえそうだし」
村に行つてない。行つてもいないことは分かっている。

「そうか…。ま、そのうち話してくれるだろうしな。あ、明日は村長のところ行くんだぞ？」

「はいはい」

父さんは魚を持って去っていった。

「まーた明日から勉強か、面倒だ」

さつそく愚痴を言うメロン。

「日も暮れてきたし、帰ろうか」

僕も日常に戻るのが寂しい。

「そうだね、結構楽しかったよレオ。じゃ。行く、ミイナ」

「うん」

「さよなら、メロン、ミイナ」

解散した。

誰もいない村

夜。自分の部屋のベットで横になって剣を眺める。

(…また、明日から元に戻っちゃうのかな…)

ドンドンドン

1階でドアを叩く音が聞こえた。こんな時間に誰か来たらしい。

「…レオー。ちょっと降りて来い」

(…父さんの声、なんだろう?)
階段を下りる。

「レオ、今から村長の家に行くんだ」

「え？」

「いいから、早く」

「は、はあ…。じゃ行つてきまーす…」

父さんの雰囲気、何も言えないまま、村長さんの家へ。

「レオも呼ばれたんだ？」

村長さんの家にメロンもいた。

「うん…。あの、何かあつたんですか？」

「お前達、隣村に行つたんだよね？」

「は、はい」

「何があつたか知ってるか？」

僕とメロンは顔を見合わせた。

「実は…隣村には行つてなくて…」

メロンが説明してくれた。

「…お前達…何か隠してないか？」

村長さんは嘘をついたときは鋭い。

(う…)

「信じてくれないかと思つたんで言わなかつたんですが…その」

メロンが洞窟で石像を見つけ、それが割れてミイナが出てきたことを説明した。

「
…」

黙る村長さん。

（当たり前だよな…信じれるような話じゃない。……隣村の話が聞きたいんだけど）

「隣村で何かあったんですか？」

聞いてみた。

「あ、ああ…。それが、急に誰もいなくなっただ。なだれに巻き込まれたとかじゃあない。建物は無傷だし荒らされたようでもないで、人だけがいなくなった」

「…引越し？」

「
…」

メロンの一言は暗い雰囲気と和ませようとしたのか？本当にそう思ったのか。

「…そのミイナちゃんは、スーケットさんの家にいてもらえるかな」
村長さんが口を開いた。ちなみにスーケットはメロンの苗字。

「大丈夫です」

うれしそうに即答するメロン。

「よかった。何か困ったことがあったらいつでも言ってくれ。さて…夜遅くに呼び出して悪かった…。…気をつけてお帰り…。隣村には行かないようにな…。最近2人とも活発だから…。それと、明日は来るんじゃないぞ」

頭をかいて何か悩んでいるらしい村長さん。

「…はい」

隣村行ってみたかったのに。

「はい。おやすみなさい」

立ち上がろうとする。

「レオは…ちょっと残ってくれ」

「は、はい」

座りなおす。

宿題でも忘れてたかな。

「じゃ、おやすみ、レオ」

メロンもそう思ってるみたいで、にやにやしていた。
村長さんと僕だけになった。

「人を信じるということはどいうことだと思っ？」

唐突な質問。

「え……」

「わしは、その人を信じると決めたら考えることを止める、それが信じるということだと思っっている。疑いだせばきりが無い。ときには雑音に耳を塞ぐことだって大事だ。それで失敗しても後悔も反省もしない決意。そいう愚かさ……それが信じることだろう」

「は、はあ……」

（何言ってるんだろう。まあ、持論をぶつぶつ言っことは結構あるけど）

「……深い意味は無い。ちょっと思っただけだよ……。気をつけて帰るんだぞ……」

「はあ、おやすみなさい……」

家に帰ってベットに横になる。

（隣村に行ってみたい……。人が全然いない村ってどいう感じなんだろう……）

ジリリリリばしん

（あと5分……）

時計を手にとって見る。

（！げ……。とっくに村長さんの家に行く時間なんて過ぎてる……。おこしに來ないっことは父さんも寝坊か……？）

階段を下りて1階に。

「父さんー。おーい。また怒られるよー」

人のことは言えない。

（もう出たのか？最近洞窟探検してて疲れてたから、起こされたと起きれなかったんだな）

ハムを切って、パンを焼いて、コーヒー入れ、ゆっくりと遅めの朝食を楽しむ。

（どうせこれだけ遅刻してるんだから、もうどうでもいいや…）

「さて、行つてきまーす…」

僕以外誰もいないけど、挨拶だけする。やっぱり不安になりながら外に出る。

（…？）

不気味なほど静まり返っている。人がいないだけじゃない。人の気配さえしない。遅く家を出たからだろうか。自分の足が雪を踏みしめる音が聞こえる。

（足音って大きいんだな…）

村長さんの家に着く。

「おはようございます…」

やっぱり誰も居ない。

「レオー…遅いよー」

メロンがいた。ほっとした。

「寝坊して、起きたら父さんがいなくてさ…。外に出ても誰も居ないし、みんなどこ行つたの？」

「ミイナがいることと、早起きしたこと以外は同じ…。どうしたんだろっ…」

メロンが視線を移す。ミイナが寝転がって村長さんの家にある本を読んでいた。

「…隣村と同じことになったのかな…」

昨日の話を思い出した。

「かも…外に出てみようか…？」

元気ないメロン。

「…だね」

外に出てもさっきと同じ。雪を踏む音が3人分になっただけ。

「…」

「…」

「…」

「誰かいませんか？」

ミイナがいきなり叫んでちょっとびっくりした。

「1件1件回ってみよう」

「…うん」

うなずくメロン。2手に別れて家を回ってみる。

どんどん

「ごめんくださーい」

片っ端からドアを叩いたり、呼び鈴を鳴らす。

がちゃ

「お、おじゃましますー」

鍵のかかってない家には勝手に入ってみる。

2時間くらいたっただろうか。メロン、ミイナと合流した。

「誰かいた？」

「誰も…どこ行ったんだろう…。パパも、ママも…」

「お姉ちゃん…」

泣きそうなメロンと気遣うミイナ。

「……………メ」

「だああああああ！！！！誰か出て来ーーーーい！！！！いないの
——！！？盗むぞ！！金取るぞ！！引き出し全部開けるぞ！！日記
も全部読むぞ！！出さなかった恥ずかしい手紙も読み上げるぞ——
————！！！！」

「ひえっ」

声をかけようとしたら、メロンが大声で叫びだし、ミイナがびっくりしてた。

「ぶっ」

叫んで元気を出したみたいだ。

「…なんか…臭い？」

くんくん臭いをかぐミイナ。

「ほんとだ…何か焦げてるような」

確かに臭い。

「あれ…」

メロンが見ている方向をしてみる。まだ細く薄い煙が窓から立ち上っていた。

「火事だ！」

「うん、火事だ」

「燃えてるー」

動転してぼんやりしているメロンとどこか楽しそうなミイナ。

「…」

「…」

「…」

「急ごう！！消さないと！」

たっぷり一呼吸おいてから走り出す。2人も我に返ったのかついできた。煙の出ている家に、ドアを蹴破ってはいる。

「こっちか！」

台所。火にかけられた鍋とその周りが燃えていた。適当にソファにかけてあった服を取ってばさばさと火にかぶせたりしてみる。

「ふう…あっさり消えた」

冷や汗をぬぐう。

「…火を消す暇もなかったってこと？」

真っ黒い鍋を見つめているメロンが呟いた。

「…そういうことだよ…。とりあえず…他の家も見よう」

また手分けして他の家にも入ってみる。火事にはなっていないが、何件か火をつけばななしかった。小さな村でも全部入るとなると結構時間がかかった。家を回った後は、一旦メロンの家に全員集合した。

「ふうー…」

「とりあえず…何か食べようか？」

メロンが立ち上がる。

「できるの？」

「まあ、まかせといて…」

ぬいぐるみで遊んでいるミイナを見ながら待った。

「…おまたせ」

自信なさげの顔が気になる。

「……うん…」

「……」

黙って食べる僕とミイナ。

「悪かったな」

何の反応もなく腹が立ったらしい。心の中でメロンに謝っておこう。

「さて…これからどうしようか？」

話題を食事からそらそう。

「隣村に行ってみない？ 私達がここにいないみたいに、誰が残ってるかも」

もそもそと進まない食事を続けているメロン。

「そうだね…行ってみようか。ちよつと待ってて」

「どした？」

「昨日の剣持ってくる。何があるか分からないし」

少し僕はつきつきしている。

「…私も斧持ってくるかな」

メロンはちよつと真剣だ。

自分の家から戻ってくると家のドアの前で2人が待っていた。

「さあ、行こう」

道に沿って進むだけで何も起こらず、到着。また、2手に別れて1件1件家を回る。

どんどん

「おじやましますよ」

がきっ

「ドアも壊しますよー」

すぱっ

剣でドアを斬って入る。誰もいないのを確認すると次の家で同じことの繰り返し。だんだん面倒になって最初から無言で剣で斬って入る。

すぱっ

誰もいないのを確認。戻るか。

「誰だ!!」

声のする方を向く。

「うわあ!!」

足を蹴飛ばされて転ぶ。

(剣を)

がんっ

剣を蹴っ飛ばされた。

「ぐっ」

上に乗っかられて、目の前に短刀がきた。

「村の人達はどこにいる？」

「し、知りません…。ぼ、ぼぼ、僕も、隣から来て、隣の村から来て、僕の村が誰もいなくなって、あの、僕はあるんです、それで隣の村のこの村、誰もいなくて…」

「……」

すっとな立ち上がった。

「あ、あの…」

疑いは晴れたんだろうか。

「誰もいなくなっていて…取り乱していた。悪かったな」

今まで慌てていて分からなかったけど、きれいな女の人だった。

(薄紫…変な色の髪だ。でも、きれい。長いツインテールが似合ってる)

「…？どうした？」

「い、いえ…」

焦った。

「誰かいるよ？」

ミイナの声がして、2人が部屋に入ってきた。

「仲間か？」

「仲間だ！」

僕が聞かれて、答えたのはメロン。

「…ずいぶん物騒なものを…持って歩けるのか？」

じつとメロンの斧を見る女の人。

（身長くらいの斧だもんな）

「こつ見えて、怪力で有名で」

意味の無い嘘をつこうとするメロンから、女の人が斧を取り上げた。

「！」

軽くてびっくりしたみたいだ。

「なんだおもちゃか」

「違うよ」

斧を返されたメロンがそれで花瓶を斬った。

すぱっ、ごと、ざばー

花瓶が割れずにきれいに斬れて水が流れ出した。

「…何でできてるんだ？」

女の方は花瓶を見つめたままつぶやいた。

「さあ…洞窟にあつたから、分からない」

ちよつと得意顔のメロン。

「古代技術の武器か。単純な刃物は珍しいな。…その洞窟は近いのか？」

女の方は興味を持ったらしい。

「ここから歩いて…1時間くらい？」

メロンが答えた。

「昔はここに住んでいたのに…知らなかった」

女の人がつぶやいた。声もきれいだ。

全員一旦静かになる。

「私はヴィヴァ・フリデリーバ、あなたたちの名前は？」

「私はメロン、こっちがレオ、この子はミイナ。よろしく、パープルさん」

「パープルさん？」

「言いくいから、いいでしょ？」

「ま、まあ、いいか」

メロンに押し切られたみたい。

「…それはいいとして…。村に誰もいなくなって…連絡船が来るのを待つしかないか」

話題を切り替えるヴィ…パープルさん。

「来月まで待てば来るしね。パープルさんもそれまで私達と一緒にいる？」

メロンの中ではすっかりパープルさんになった。

連絡船

それから連絡船が来るまでの約1ヶ月半。パープルさんの家のドアは僕が壊してしまったのでメロンの家で4人で過ごすことになった。

数日後。

スパツ、ばらばら

「剣のほうも凄いい切れ味だな。蹴飛ばしたとき、足を斬らなくてよかった」

パープルさんが剣を持つと様になるなあ。

「剣習ったりしてたんですか？」

聞いてみる。

「いや、独学」

剣を眺めながらあつさり答えた。

「剣、教えてくれませんか？」

「ま、まあほぼ素人の私でよければ」

「メロンも習えば？」

「私斧だし」

そっけないメロン。

「大事かもしれないよ？何があるか分かんないしさ」

何だかやる気なさそうに見えるメロンをもう一度誘う。

「……」

しぶしぶ加わった。3人で長めの木の枝を使って練習した。

「えい！やあ！はい！！」

メロンが枝を振り回す。

こつ、どてっ

足をパープルさんに蹴飛ばされて転んだ。

「そんなに振り回さないで、相手の動きをよく見なよ」

「はいよ」

一瞬むすつとしてパープルさんを見たけど、頷いた。

この間に来た洞窟に来ている。

「こんなところに、洞窟…というか神殿みたいなものがあつたんだな」

武器のあつた洞窟の中で、彫刻や柱を見ながらパープルさんは驚いていた。

「あの宝箱です」

いろいろ手にとつてみて、

「これにするか」

短刀を2本手にした。

「ん…全部持つていけばいいか？」

パープルさんは宝箱の中の武器を眺めた。

「…止めときましよう神殿だし…」

崇りがあつたら怖いから止めておく。

「まあそれもそうか…ここにあつた方が取られなくて安全かもな」
そのかわり僕やメロンの武器の予備として短刀2本とあとナイフを何本か持つて行くことにした。

「ただいまー」

「ただいま」

メロンの家にいたメロンとミイナにあいさつ。

「いい武器ありました？」

メロンがパープルさんに聞いた。

「これ、短刀だな。あとはナイフを何本か」

「あと、僕とメロンの予備に短刀持つてきた」

短刀をメロンに渡す。

「ほう…こっちのほうが使いやすいかな」

短刀を眺めるメロン。さて…とパープルさんが立ち上がる。

「どこ行くんですか？」

「ちよつと試し斬りに」

「僕も…」

ぎゅ

ミイナに手をつかまれた。目をつぶってふるふる首を振っている。

「ん？どうしたの？」

聞いてみても黙ったまま。

「ははっ。試し斬りは一人でいい」

パールさんは笑いながら出て行った。

？

ミイナはさつと手を離してもとの位置に戻ってさつきまで持っていた本を読み始めた。そういえば少し疲れた。テーブルについて一息つく。

「…連絡船が来てさ…村のこと話して…あとどうなるんだろう？」

メロンに話しかけてみる。

「国の人達が誰かが村の人探してくれるんじゃない？街でのんびりするか、村で待つか…。大勢なんだし…誰か1人見つければ全員見つかるんじゃない？」

そっけないような感じのメロン。

「うん…。どうしていなくなっちゃったんだろう…」

（逆にどうして僕達だけ残ってるんだろう）

「さあ…急に寂しくなった？」

「うん…」

父さんにも、村のみんなにも会いたくなってきた。

（最初は、何だか楽しいことが始まったように思ってたんだけど…）

「私も…寂しいよ…」

急に暗い顔になったメロン。

「…」

「…」

「ああ、やめようやめよう。うまくいくと思おうよ？」

メロンが首を軽く振った。

「うん。そうだよね」

「これ、何て読むの？」

ミイナが本を持ってやってきた。

「ん？それは……」

「読めないんだね？」

にやにやしながらこつちを見てくるメロン。僕に代わってミイナに教える。くやしい。
がちゃ

ドアが開いて、パープルさんが帰って来た。

「沖に船が見えるぞ！？」

「え……」

（まだ来るはずない。村の状態が分かったのか？）

全員外に出て、沖を見る。ぽつんと船が見えた。

「船だー」

指をさすミイナ。うれしそう。

「連絡船だ……」

足りない食料を運んできたりする船。何回も見たので見間違いないはず。

「うん。連絡船だ……」

メロンは少し不安そうだった。

「……」

「……」

連絡船を沖で見つけてから3時間後、日も暮れ始めている。僕、メロン、パープルさんはずっと見ている。ミイナは飽きて歩き回ったり、ペンドアントを眺めたりしている。

「一向に近づいてこないね……」

たぶん全員思っていることをメロンが言った。

「まあ、こんなことをいうのは……なんだけど。あれ……人が乗ってる

のか？」

たぶん全員思っていて口にしなかったことをパープルさんが言った。

「ボートで行ってみよう……」

「父さんのボートがあるよ……」

パープルさんの言葉を受けて、ボートを取りに行く。

ボートの準備ができて、全員乗り込んだ。
ばりばり

誰も何もしゃべらず、船のスクリューが水をかく音だけが聞こえ、日が暮れ始めていて寒い。ようやく船に近づくと船体が壁のようにそびえていた。船にくっついてるうきわにつかまって、階段を使って上に移動した。

「……やっぱり人の気配がしない……」
がっかりした。

「探してみよ？ みんな寝てるのかもしれないしさ……」
メロンが僕の肩を叩いてくれた。

全員諦めているが、手当たり次第にドアを開けて調べてみた。結果、誰もいなかった。

「まあ……悪い予感はしていたが……」
パープルさんは肩を落とした。

「ど……ど、どうする？」
みんなに聞いてみる。

「もうだめだあああああ……！ もう世界中誰もいないんだ……」
！……！

こうやって発散するのがメロンだ。

「ママあ……パパあ……」

ぼろぼろと涙をこぼし始めた。発散するためではなくて本当に限界だったらしい。

「父さん……」

僕も悲しくなってきた。

「う、う、う、ぶわあーん！！」

突然ミイナが大声で泣き出した。

（そうだった。ミイナは村の人達が居なくなる前から一人ぼっちだか・・・）

メロンもミイナを見て何とか泣き止んだ。同じことを考えたんだろ。パールさんは暗い顔だけど口だけ笑顔を作りながらミイナの頭をなでている。

「この船…動かせない？」

メロンがぼそつと呟いた。

「…操縦できる？」

聞いてみる。

「できるわけないでしょ？」

けるっと言うメロン。

「でも、あつちに操舵室？みたいなものがあつた…」

そう続けた。全員で、甲板の上にある部屋に行ってみる。

「…さっぱり分からないね…」

レバーだらけで何をどう動かせばいいか分からない。

「全部オンでいいんじゃない？」

がしがしゃレバーを動かすメロン。

（大丈夫かな…）

ががががががが…

船体が揺れだした。

「だ、大丈夫なの？これ！？」

「知るかあ！！」

メロンに怒鳴り返された。

「ハンドルを…！！」

パールさんがハンドルをつかんで、

「ど、ど、どつちに切ればいいんだ？」

慌ててる。

「地図！！」

テーブルに地図が広げてあったけど、がたがた揺れてて読みにくい。地図を読む道具らしきものが箱の中にたくさん入っていたが、何をどう使えばよいか分からない。

「……どっちだ！？」

パールさんも焦って聞いてくる。

「……分からないよー！！」

この紙が地図ということ以外、今居る場所も何も分からない。

「メ、メロン！とりあえず、速度を落としてくれ！！」

「どれが速度か分かんないってばー！！」

パールさんに叫ばれ、大量のレバーやら目盛りやらを前にして、半泣き状態のメロン。

「うわっ！！前に氷だ！！曲がるぞ！！！！」

パールさんが叫んで、ハンドルを目いっぱい回転させる。
ががががががが

思いっきり船が曲がり、机の上にある地図やら何やらが床にどこどか落ち、体がどこから引っ張られる感覚。

「ふうー！！」

パールさんが一気に大きく息を吐いた。
がちゃん！！ガクン！

「ひっ！！！！」

急に速度が落ちた。

「速度変えた……」

メロンがその場にふらふら座り込んだ。

「……もう大丈夫だよ……」

大きな柱にずっとしがみついているミイナに声をかけた。

街の人を追って

その日は船内で眠り、次の日、地図が分からないので目で大陸を確認しながら進むことにする。半日後。

「港だ…。人が見えるか？」

パールさんに言われて、置いてあつた双眼鏡で港を見てみる。

「うーん…。いる！！誰かいるよ！！」

感激して声が裏返ってしまった。

「ほんと？見せて！！」

メロンに双眼鏡を取られた。

「本当だー！！船もいっぱい来てるし！」

みんなほつとして笑顔になった。港に手を振って誘導する人の指示に従って進む。

「よしつと」

メロンがレバーを引いて船を止め、全員降りた。

「人がいる…」

当然のことに感動する。僕、メロン、ミイナがぼーっと港にいる人達を眺めている間、パールさんはあたふたと集まってきた港の人達に事情を説明し、しばらくしてこっちにやって来た。

「とりあえず、領主のところに行つて事情を説明することになった。村と連絡が取れなくておかしいとは思つてくれてたようだし…」

パールさんが事情を説明しに行っている間、宿で待機することになった。

「ふかふか…」

ベットに横になる。費用は領主が持ってくれるそうで、高い宿にしたからいいベッドだ。メロンやミイナは隣の部屋でゆっくり寝てるんだろう。

「…」

何で村の人達はいなくなっただろう？俺達がミイナを石像から出して、武器を宝箱から出して…そのせいだろうか？

(…考えるの止めて…寝よう)

ドンドン

「レオー。パープルさん帰って来たよー」

メロン達の部屋に全員集合しパープルさんの話を聞く。調査団を出してもらえらしい。他にもその間に住むかという話やらお金の話やらいろいろ聞いた。とりあえず心配しなくていいらしい。

「というわけで…今日は疲れた。何か食べてから眠ろう」

パープルさんは食事中も眠そうだった。疲れてるんだろう。

夜中。

こつこつ…

ドアを静かに叩く音で目が覚めた。

「レオ…レオ…」

メロンの声？

「どうしたの…？」

ドアを開けて、メロンを部屋に入れる。

「ひ、人が…窓の外見てみて…」

「ん？」

言つとおり窓の外を見た。

「なんだあれ？」

街の人々がふらふらと家から出てきて道路を歩いていく。次々と人が合流して、川のように進んでいく。子供から老人まで、女性も男性も。ガス灯の明かりに照らされて幻想的といえなくもないが、不気味さのほうに勝っている。

「追いかけてみよう…！」

「パープルさんは…？」

メロン達の部屋の前を通ったときにメロンに聞かれた。

「……疲れてるみたいだし…。手紙置いとこうか。それで僕達だけ

で危なそうだったら帰ろう……」

「うん……」

ドアの隙間に手紙を入れておいて、宿から外に出る。

「あの……すいませーん……」

ふらふら歩く人に恐る恐る話しかけてみるが、こつちを見たのか見ないのか分からないくらいにふつと見ただけで視線を前に戻してしまった。

「無視された……」

「追ってみよ？」

メロンに言われて、人の流れの中に入ってみる。後ろからどんどん人がくつついてきて、あつというまに最後尾が見えなくなった。

「これって、この街の人全員入ってるのかな」

小声でつぶやいてみる。

「……そうみたい」

格好がベツトから出てきたような人が多いのでよく分からないが位の高そうな人も農民の人もいて、中には鎧を着た警備をしていた兵士まで混ざっているようだ。誰一人口を開かないので気持ち悪い。

「……」

「……」

「……疲れた……」

メロンがつぶやいた。徐々に日が登ってきて朝になりつつある。歩くペースは遅いけど、雪道を長い時間歩き続けてだんだんきつくなってきた。もう集団は街も街道もを離れて進んでいる。

「眠い……どこまで歩くんだろう？子供も歩いているのに」

言うとおりの眠そうなメロン。

「こつちに行くとなにがあるんだろう？」

「分かんないよ。村から出たことないもん。レオもそうでしょ」
「いらいらしてきたメロン。」

「……」

「……」

「レオー…お腹空いたー」

「…」

「レオー…足痛いー」

「…」

「レオー…眠」

「何か見えてきた…」

「え？」

前方に岩の塊が見えてきて、ふらふら歩いていた人たちが座り込み始めた。

「休憩するみたいだ」

「疲れたー…」

メロンもその場に座り込んだ。

「何だろうここ…」

周りにはあちこちに大きな平べったい石があり、ところどころに石が組み合わさって門のようなものだけが残っている。

「ここって、遺跡じゃないかな…？」

「レオ…。とりあえず…一旦帰らない？この人たち、眠ったり食べたりするのか分からないし…。ミイナとパープルさんも心配してるだろうしさ…」

（この人たちがどこに行くのか気になるんだよなあ…。でも、この人たち、息もあまり切れてない…）

「帰ろう…」

しょうがない。

「うんうん」

ほっとしているメロン。

「帰りも長いな…」

「…文句言わない」

メロンに怒られた。

遺跡

しばらく歩いて、宿に着いた。もう夜が明けそうだった。

「お、帰ってきたか。無事でよかった…」

「お姉ちゃん、レオー！」

パープルさんとミイナが宿の前に立っていた。

「あー疲れたー…」

おばさん臭く肩を叩くメロン。

「ふう…」

「…」

「…」

「…あの？何か見つかったのか？」

パープルさんに聞かれてはつとずる。ぼーつとしてた。

「あ、ああ、えーつと…街の人たちがいろんな人がいて歩いていつて着いていったんだけどみんな足が速くていや速くはないんですけど街の人たちが遺跡の前でいや遺跡じゃなくてその石がたくさんあるところがあつて…えーつと」

「落ち着いてよ…」

メロンに白い目で見られた。

（説明って苦手なんだ…）

「まあ、街の人たちが遺跡みたいなところに行つたと」

パープルさんは首をかしげてはいるけど、伝わったようだ。

「はい、そうです」

「…また4人になつちやつた…」

石ころを蹴飛ばすミイナ。

「…また誰もいないわけか。とりあえずその遺跡に行ってみようか

…」

ため息をつきながらパープルさんが言った。

一旦宿に戻って休息し、八百屋から適当に果物を持ってきて朝食にする。

「こつこの楽しい…。場違いな言い方かもしれないけど」
りんごを食べてるメロン。

「だね」

ちよつと笑う。

「まあ、まず味わえない経験だしな」
パープルさんも。

食べ終えて、また出発。

遺跡に到着した。やっぱりみんなどこかに行ってしまったらしく、やけに広く開けた草原になっていた。

「…もう一回来てみると意外に近かったね」
苦笑いするメロン。

「結構そういうものだよね…はは」
（…もう誰もいないけど、もっと追えたかもしれない…）
僕も苦笑いする。

「入り口みたいなのがあるな」
パープルさんに言われて見てみると、石が組み合わさってできた門の下には下に続く階段が見えた。

「真つく…わ!!」

薄暗い階段を下りていくと突然明るくなりミイナが飛び上がって驚いてた。

「まだ生きてるな。この遺跡」

パープルさんが辺りを見回しながらつぶやいた。緩やかな傾斜とゆるいカーブを描く階段を長々と下りていく。

「きれいな女神だ…」

壁には壁画が描いてあった。

「露出は多いわな」

メロンにはっさり言われる。

「そ、そんなつもりじゃあないんだけど…。いや、そういうつもりももちろんあるんだけど、いやその…」

「…」

ミイナに変な目で見られる。

「まあ、宗教色のある遺跡は少ないよな。工場とか、もつと実用性重視のものがおいから」

パープルさんが少しだけ助けてくれた。

（ふう…）

改めて壁画を見る。中央にいる女性がペンダントを天に掲げていて、その周りに何人か武器を持った人がいる。さらに周囲の大勢の人たちがその女性に祈りをささげているようだ。そして壁画の隅っここには何かの塔が描かれていた。

（この塔も遺跡なのかな。それにしても…ペンダント？）

ミイナが首から下げているペンダントに似ている気がした。

「いつまでジロジロ見てんのー？」

メロンの声が聞こえてきた。振り向くと誰もいない。みんなずっと先に行ってしまったていた。

「あ、今行くよー」

あわてて着いて行く。階段を下りていくと、彫刻だらけの部屋に着いた。礼拝堂みたいなのところらしい。長イスがたくさんあって、大きな女神像の前に演台みたいなものがある。

「…天井高い」

天井を見上げて感動しているメロン。

「ここにもあるんだ…」

女神像があった。

（やっぱりペンダントしている…）

「今度は肌があんまり見えてなくて残念だったねー」
にたにたするメロン。

「そうじゃなくて…」

（天井見ててよ。今はミイナがいるから、直接言えないし…）

「普通、彫刻の女性は露出多いからなあ。残念だったなー」

（パールさんまで…）

「な、何を調べているんですか？」

（話題を変えよう）

パールさんは隅っこにある本棚から取った本を調べている。

「昔の聖典のようだな…」

「昔の文字読めますか？何て書いてあるんですか？」

「まあ…大まかな内容くらいは。人間の罪の結晶である赤い悪魔に支配されたこの世界に、聖なる島から現れた聖女サマがやってきて、人々を天国に続く塔へと導いてくれますよ…だいたいこんなところだな」

「もう全部読めたんですか？」

「最初に大体のあらすじが親切に書いてあった」

（なんだ）

グウー

「ん？」

音がした方向を向く。

「…腹減って悪いか」

メロンがいた。

「…ごはん食べたいね」

「…ニヤニヤするな」

怒られた。

「ごめんごめん」

謝った。

「手がかりもないみたいだし、一度戻ろうか…」

パールさんはため息をついた。

学者の本

「ミミル…お前最近になって信心深くなったのか？」

午後、大学の図書館で本を読んでいるとギーデットが話しかけてきた。

「まさか…。こんな古臭い本は好きにならないさ…。でも、南に化け物がいて人は寒いところにしか住めないっていうのは事実だ。どこが本当で、どこが嘘なんだろうと思ってさ…」

「昔はやっただけのやつだろそれ？それに、南の化け物は突然変異したコウモリらしいぞ？」

ギーデットはにやついている。バカにしているようだ。

「でもね…。うそ臭いけど、リアルに感じられるところもあるんだこれ…」

「読んでたらそう思うもんだよ。それに、お前なあ、せっかく大学生なんだぞ？もつとこう…ないのか？何か？」

「お前もな…。俺に話しかけてないで、女でもさそったらどうだ？」

「…それができてれば、お前に話しかけねえって」

ギーデットは笑った。

「何も予定がないなら…遺跡を見にいかないか？」

「見に行つてどうするんだ？」

「…警備員の目を盗んで中に入るんだ…。この聖典さまによると、聖女のペンダントを作った人間がいたらしい」

大学の図書館から歩いて15分ほどのところに小さな石の塊がある。上は崩れているが地下があつてその壁画と聖堂は見学することができ。壁画には宝石を掲げた女性、左右にはずらつと人が描かれていた。

「読んだ聖典さまによると、『ペンダントを持った聖女が現れて、人々を救済の塔へと導いてくれるのでした。めでたしめでたし』っ

ていうことだったな」

古い言葉で書かれた読みにくい聖典を確認する。

「…これを見に来たのか？」

ギーデットはいつもどおりやる気がない。

「いいや…あの警備員がいる先が見たい」

聖堂の先には剣を持った警備員が立っていて先に進めない。

「で？どうするんだ？」

ギーデットはなんだか楽しそうだ。

「…どうせ雇われ警備員だろ？教会の人間じゃない…」

「おい、正面から行くのかよ…」

小声の忠告が聞こえてきた。俺は警備員に話しかける。

「すいませんが、中を見たいんですよ。大学の課題にちょっと変わったことを書きたくて…」

「申し訳ありませんが…」

警備員は面倒くさそうに至って事務的な態度をとった。

手を開けて札を1枚見せてみる。

「5分だけ」

「内緒ですよ…？」

扉を開けてくれた。扉の先には長い廊下があった。これまでと違ってランプも何もなく、俺達のつけたライターだけが明かりだった。いくら払ったんだ？」

距離を置いてからギーデットが聞いてきた。

「全然。安い時給なんだろうな、かわいそ」

廊下の先には1つ狭い部屋があった。

「何も無いな、これだけかよ」

ギーデットはもうがっかりしたようだ。

「昼飯代くらいで何かが起こるとは思ってないさ。この部屋に何かあっても教会が撤去しているだろうしな…」

壁を叩いてみる。

「回転ドアでも探しているのか？」

「そつだよ」

「…」

「…」

「…回転したか？」

「…いいや…」

「ふん！ふん！ふん！」

全力で壁を押してみる。

「…気が済むようにすればいいさ…」

ギーデットは床に座り込んだ。

「ふんぎぎぎ…」

もつと力を込めて壁を押してみる。

こーんこーん

ギーデットは欠けた石を投げ始めた。石は床を転がり、欠けた床の一部にぴつたりとはまった。

ゴウウウン…

「お？」

壁の一部が持ち上がり、小さな隙間ができた。手を突っ込んでみる。

「何かあったか？」

ギーデットは興奮している。

「…！」

手に当たったものをつかんで連れてくる。

「…本だな」

「俺の手柄だな…ははは」

ギーデットは陽気に笑った。

「ハハッ」

遺跡からの帰り道。手に入った本を読みながら歩いている。

「…いつの間にそんな文字読めるようになったんだ？」

ギーデットが感心しているのか、呆れているような声で聞いてき

た。

「聖典を元の言葉で読みたくて学んでいたからね…」

「で？何か面白いこと書いてあったか？」

「『…400年が経つと聖女の石化が解ける。石化が解けた聖女は街をめぐり、ペンダント型の装置によって人々を救済の塔へと導いていく』だそうだ。で、今年がちょうど400年目。で、『聖女が持つペンダントとは、人を惑わす装置である。ペンダントは夜に光を放ち、その光は周囲の人々を惑わし、救済の塔へと歩ませる』そして、『…救済の塔は太陽の光を集め、数時間に一度周囲を焼き払う…』聖女について行った人たちはかわいそうに焼き払われるわけだ」

「で？何も起こってないじゃないか…こういうのは、ずっと前には騒がれて、いざそのときが近づいてくるとなんにも起こらないし、覚えている人もいないものなんだよ」

ギーデットはやる気ないモードに戻ってしまった。

「暇つぶしにはいいだろ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4133x/>

氷の村とミイナ

2011年12月1日22時56分発行